

【 5 】

|         |                  |
|---------|------------------|
| 氏名      | 北尾倫彦             |
|         | きた お のり ひこ       |
| 学位の種類   | 文学博士             |
| 学位記番号   | 論文博第58号          |
| 学位授与の日付 | 昭和45年11月24日      |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当     |
| 学位論文題目  | 対連合学習における媒介連合の研究 |

論文調査委員 (主査) 教授 園原太郎 教授 野田又夫 教授 池田義祐

論文内容の要旨

本論文は、対連合学習法による言語連合学習の中に、実験的に媒介連合を挿入し、記憶および転移における媒介効果を実験的に究明したものであるが、更にかかる媒介機構を文脈的・概念的意味関係における媒介に発展せしめるべき展望をもつ若干の実験的研究を補章として加えている。

行動主義心理学における言語連合研究の過程において、媒介の問題が理論的に展開してきた経過を概観した(第1章)のち、実験的な媒介連合図式の適用において、果して媒介効果が確認されるか否かを先ず検討する。3段階法による実験では、連鎖図式、刺激等価図式、反応等価図式の何れにおいても、媒介の促進的効果が確認されたが、干渉効果(負の転移効果)は実証され難いことを示す。従来実証が困難とされていた4段階方式においても、同様の促進効果が証明され、併せてこれが先行学習中の知覚的範疇化によるものでないことも証明した。しかるにテスト学習のかわりに刺激項に対する連想反応を求める実験にあっては、連合図式の違いによって媒介効果に差がみられ、直接連合における方向性が強く働くことが示された。著者はかくして対連合学習法において実験的に媒介効果を生ぜしめ得ることを確認したが、実験事態の諸要因が微妙な影響を及ぼすことを指摘する(第2章)。

媒介連合成立の基礎をなす先行直接連合の連合強度と媒介効果との関係を明らかにするため、先行学習の程度を組織的に変えて実験が行なわれた。その結果完全学習以下の水準での学習程度の差は明らかな媒介効果の差をもたらすが、過剰学習段階における学習程度の差は、その影響がみられなかった。これによって媒介過程が成立するには基礎となる直接連合が、少なくとも完全学習程度にまで形成されていることを要するが、それ以上の過剰学習がなされても、媒介効果を増大することは期待できないと結論する(第3章)。

如上の実験効果に基づき、著者は、媒介効果は先行学習中に獲得された媒介過程によるものであるとするS-R理論を排して、媒介はテスト時における認知的体制によるものであるとする自説を提唱する(第4章)。そしてこの自説は、先行学習系列における刺激提示法やリスト構成において、その媒介関係が認知

され易い条件の方が然らざる条件よりも遥かに媒介効果が証明され易いことを確認した諸実験（第5章）、および先行学習中に習得を強化するような条件を与えても媒介の効果には影響がないのに、テスト学習直前に既習のリスト間の関係について想起を求める教示を与えた場合、先行学習の程度にかかわらず、媒介効果が顕著になるなど、テスト時における構えの影響が大きいことを証した諸実験（第6章）によって、支持されるとする。尚、先行学習リストに実験的媒介結合と連想的結合とを組合せて、その効果を調べた諸実験では、連想的結合による媒介が つねに実験的結合に上廻ることが示され、それを単に連合強度の差によるとするよりは、体制化の質的な差によるものであると考察する（第7章）。

以上は、媒介連合図式を用いて、機械的な記憶学習の中で実験的に媒介の効果を解明しようとしたものであるが、自然の状況における媒介には、すぐれて文脈的、概念的な意味連関が関与する。著者の究極的な研究目標も、かかる意味的体制化の過程の解明への実験的手がかりを得ることにあるのだが、その若干の摸索が補章として加えられている。即わち、補章Ⅰにおいては、学習される対連合項が文章化されるとき媒介効果が著しいこと、文章化の内容には年齢による差異のあることが明らかにされ、補章Ⅱでは、先行学習とテスト学習の反応項間に概念的な上位・下位関係のある場合の効果が吟味され、概念関係による媒介の特質が考察されている。補章Ⅲでは、対連合項間の連想や意味連関についての各種の測定値間の関係に、因子分析による吟味が行なわれ、この種実験での変数処理への反省が試みられている。

### 論文審査の結果の要旨

連合の機構が、複雑な行動に適用され、理論化が深められるとともに、媒介過程について種々の立場からの学説が行なわれ紛糾している。殊に言語学習研究の領域においては、学習材料の諸特性、その意味連関、学習の方式、主体的要因等の複雑な相互作用による微妙な影響が、その連合や転移についての実験結果を左右し、これを統一的に解釈するには、媒介機構に関する秀れた理論が要請されるのであるが、現在の心理学の水準ではまだその見透しも困難な状況である。

著者は、実験的に媒介項を操作する媒介連合図式の適用による数多くの丹念な研究を基礎に、媒介効果が学習過程における連合強度にのみよるのではなく、既習された知識が相互に関連づけられ、新学習に際して想起、利用される認知的構造によるところが大であるという見解に達した。著者の立論は一々明確な実験的検証を経て行なわれ、従来多くの研究において想定されていた刺激～反応項間の連合強度説を越えたことは、高く評価されるべきである。

著者はさらに、かかる認知的構造が勝れて意味的連関であることを実験的に裏づけたが、かかる意味的構造自体が如何なる心理学的機制であるかの解明にまでは至っていない。しかし、著者が到達した新たな地平に立っての展望は、この至難の問題に対する実験的追求めの道を拓くものとして寄与するところ極めて大である。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。